慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	John V. A. Fine; The ancient Greeks; a critical history
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.2/3 (1986. 1) ,p.141(255)- 147(261)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860100-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

John V. A. Fine;
The Ancient Greeks; A Critical History.

Pp. XIV+720.
The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London 1983. $35.

真下英信

プリンストン大学の古典学の名誉教授である著者 Fine は、*Horoi: Studies in Mortgage, Real Security, and Land Tenure in Ancient Athens*, 1951 などの著作で我が国でも以前から知られており改めて紹介する必要はあるまい。ここに紹介しようとする本書は、長年研鑽を積んだ著者が八十才の時に上梓された七百二十頁にも及ぶ浩瀚なもので、これを評者の如き未熟な者が批判、紹介するのは至難の業と言うより暴挙と言えるかも知れない。しかしながら、巧みな筆致に魅せられて一気に読了すると評者なりに色々と思うことが浮かんで来た。この大著を網羅的に扱うのは限られた枚数ではとても不可能なので、以下評者の関心を中心に述べてみよう。

第一章（The Early Aegean World）本章は考古学的成果を基に新石器時代からミケーネ文明の崩壊までを概観する。原ギリシア人は土着人とするよりも前二千年前後に渡来した民族とみるのが正しい。クレタ文明を受容しながら発展した彼等は前千四百五十年頃にクレタの諸都市を征服、さらに小アジア方面で兵士、商人として活躍した。*Ahhiyawa* はギリシア本土でなく小アジアにあったろう。イーリアスの「船のカタログ」の起源はミケーネ時代である。トロイ戦争の史実性を否定してはならない。この戦争の原因は海の民の侵人により地中海世界が混乱し、その余波を受けて交易が衰退したため窮地に陥ったミケーネ世界が活路を求めて行った解決策の一つであった。

ドーリア人侵入がミケーネ文明の崩壊原因であるとする従来の見解は考古学的にも伝承的にも支持し得ない。真因は究めがたいが、外敵侵入説よりも被支配者の反乱蜂起を原因とする方がより妥当である。従来、ドーリア人が将来したと考えられていた原幾何学文様土器、火葬の慣習、鉄製の武器のいずれもドーリア人とは関係なく、東方より渡来した。評者の寡聞かも知れないが、数あるギリシア史の概説書の中で正面切って不満分子の反乱をミケーネ社会崩壊原因としたのは本書が最初ではなかろうか。

最後に歴史的にホメーロス問題の一端を語る。ホメーロスの作品の核には事実があるが、叙事詩の性格上ミケーネ文明は描かれていない。むしろ、ホメーロスが生存していた時代より少し前の前十・九世紀の世界が詩に反映している。従って、ミケーネ世界

研究にホメーロスを用いるには限界があり、もっぱら考古学によるべきである。なお、ミケーネ文明についてはミケーネに限定して簡単に述べられているのみで読者には物足りなかろう。

第二章（The Dark Age）　ここではミケーネ文明崩壊から大植民時代の開幕となる前八世紀中頃に至る時代を論じる。まず当時代の考察上必要な史料であるホメーロスとヘシオドスの詩、伝承、考古学的成果、諸制度にみられる残存、そして社会学的方法の可能性を考察した後に、ミケーネ文明崩壊後の植民活動を検討する。イオニア植民でアテーナイが果したと伝えられる指導的役割は史実を反映するが、前五世紀のアテーナイの宣伝による所が多い。暗黒時代は単なる混乱期ではなく、来るべき社会の形成期として重要である。例えばギリシア社会の根幹たる *phyle, phratria, genos* はこの時代に成立した。従来の定説に真っ向から対立するこの見解の詳細は、第七章で論じられる。他方、暗黒時代の社会の中核たる家（*oikos*）は多面的に本章で論じられている。

次に土地制度に一言しておこう。始め open fields 的に耕作されたが、前九世紀頃から家所有が中心となった。土地は家全体の所有で、各世代は用益権を持つのみで人は家の全体的安寧の為に生活し働いた。ここでは現代的意味の所有が考えられてはならない。従って、土地の譲渡が可能であったか否かと言う発想自体が時代錯誤である。だが、自己の土地を耕作する独立した農民も少数だが存在した。この他に、デーミウルゴス、テテース、職人等も論じられている。

当時政治的には王や有力者中心の社会であった。しかし民衆は受動的立場に置かれていたとは言え完全に無視された存在ではなかった。

第三章（The Age of Transition）　本章では前章で論じた社会から古典ギリシア文化の母体と言えるポリス社会が如何にして生れたかが検討されている。ポリス組織は前八世紀中頃に、従来言われていた小アジアではなく、ギリシア本土で最初に生れ、大旨王権の衰退及び貴族の抬頭と時を同じくしている。では貴族とは一体何か、著者は改めてその成立を論じる。

ホメーロスから、貴族と平民を峻別する通説は両者の区別を否定する見解と同様に問題がある。前九世紀頃から有力な家が他のそれを合併し血縁のあるなしに関係なく結合し *genos* を形成していった。この間に *genos* の起源は古いとの伝承が作られていき、漸次社会的経済的軍事的優勢を背景に階級意識を獲得し、その成員は生まれと富を強調する貴族となった。彼等は *genos* を通して団結、土地を独占し軍事力、司法権をも手中に収めて自己の権力を行使するに至った。だが、かかる貴族の勢力も前七世紀になると重装歩兵及び動産の重要性の増加と言う軍事的経済的変化に呼応して衰退していく。しかし、貴族はその後も長くギリシア文化の担い手として重要な役割を果した。時代を画した大植民活動が始まったのは彼等の支配下であった。

第四章（Colonization）　本章は前八世紀中頃から前六世紀中頃に至る大植民活動について、原因、植民国家、植民地域、植民市と母市の関係、植民者と原住民の関係、フェニキア人との関係

そして植民の本国への影響等々の諸問題を論じる。植民原因として著者は母国の人口増加に起因する土地不足を重視する。植民活動直前のギリシア世界は農業と牧畜によって増加する人口を養う土地は最早なく、しかも農耕によって生活出来ない人を養うに十分な交易や産業は未発達であった。まず土地不足、政治的内紛で植民者が送られたのであり、商業的関心は二次的であった。ピテクーサイ、クマエも金属入手が目的で植民されたが、両地共に沃地を控えておりこの植民を商業的か農業的かと二者択一的に考えてはならない。個々の植民市の歴史は本書に譲るとして、本章にはギリシアを始めとしてキュレネー、ローヌ川などの地名の由来も論じられており一般読者も面白く読める。

ところで、評者が思うに植民原因として土地不足は確かに大きな要因であったがその土地が如何に利用され生産物が如何に流通したか必ずしも明白ではない点や商業的関心の強さをうかがわせる伝承を考慮するならば、商業的関心も余り低くみてはならないだろう。この点、かつて Bücher, K. や Meyer, E. が論争した問題を単に学説史的に回顧するのみでなく、最近の考古学的成果に基づいてより綜合的に再検討がなされる必要を痛感した。

第五章（Social, Economic, and Political Developments in the Seventh and Sixth Centuries）前述の植民活動が如何なる政治経済社会的変化を本国にもたらしたかが本章で論じられる。植民は商工業の発展を促した。この発展を近代的な意味で解釈してはならないが、種々の面で画期的変化をもたらした点は確かである。すなわち、経済的には中小農民の困窮化、動産の重要性の増加、職人（*demiourgoi*）の地位向上、軍事的には重装歩兵が漸次有力となり、従来軍の中心であった貴族の地位が低下した。前七世紀に軍の中核となった重装歩兵は貴族や富裕な農民もいたが、多くは動産による富を獲得した職人達であった。具体的経過は不明だが、彼等が政治権力を得るに従って国政は貴族政治から金権政治的色彩を強めていった。

貴族の政権独占を打破する契機となったのが成文法の制定と僭主の出現であった。著者は僭主を近代的視点から解釈することを戒める一方、僭主の支持層を上層階級としたり、僭主の貴族追放の効果を過小に評価したり通説とはかなり異なる見解を提示している。最後に貨幣導入とその影響を論じるが、ギリシア経済は貨幣経済に移行後でも自然経済的要素が根強く残っていたとの指摘は注目に値しよう。

第六章（Early Sparta）ミケーネ文明崩壊後から前六世紀末までのスパルタ史を論じる。本章はこれまでの記述に比して断定的表現が少なく、謎めいたスパルタを彷彿させる。メッセニア戦争を論じた後、スパルタ史最大の難問、リュクルゴスの国制を検討する。リュクルゴスは実在の人物で、前七世紀始めに活躍した人である。しかし、伝えられるリュクルゴスの国制全てを彼が定めたのではない。スパルタの国制変化は彼よりもキロンによる所が大である。プルタルコスの記述はスパルタを理想化した神話を伝えるのみで事実に即していない。

二王制の起源にまつわる二子説は単なる伝説で、三王説、アミュクライ合併説、王権弱体説共々正しくない。二王制の起源は極

めて古い。エポロスの起源も不詳だが、第二次メッセニア戦争の時の *obai* 設立と同時の可能性がある。ゲルーシアの権限及びその選出方法を考慮すると、スパルタ市民は通説に言われているような平等ではない。スパルタは有力者が実権を掌握している社会で、市民平等との伝承は神話である。土地制度についてもホモイオイが均一クレーロスを保持した平等者との伝えは単なる神話で、最初から不平等が存在した。後世問題となった市民減少の原因は、この内の貧民が前五世紀の生活水準向上による一層の貧困化と借財故の没落にあった。他方、有力者はエポロスへの賄賂等の不正手段の行使によって、自己の土地を拡大していった。この他、ヘロットやペリオイコイの起源、リュクルゴス神話の成立、前六世紀スパルタの覇権やペロポンネソス同盟の成立などを論じる。

第七章（Early Athens）　新石器時代から実にペルシア戦争前までを論じた本章には論争の絶えぬ問題が多々ある。シュノイキスモスは通説より古く前八世紀末には完成していた。『アテーナイ人の国制』はアリストテレスの作品であるが、本書が作者の哲学体系に合せて著されたとの見解は正しくない。本章と言うより本書の最大の論点は、*genos, phratria* の起源と性格をめぐる解釈であろう。前者は前十・九世紀政治経済社会的に権力の拡大を目論み後には貴族と呼ばれるに至った富裕な地主階級により人為的に作られた。後者は貴族に加えて平民を含み、支配者たる貴族が国民の支配手段として作った。これまでにもフラトリア等の成立年代を通説より新しく考える見解は、Weber, M. 以来 Andrewes, A., Roussel, D. や Bourriot, F. などにより提出されているが、本書を契機にギリシア社会の根幹でありながらも社会史上最大の謎である *genos, phratria* をめぐる諸問題が我が国でも文献学的ならびに社会学的研究の両面から論じられることを期待したい。

ヘクテモロイは借財問題とは関係なく、暗黒時代に有力地主の庇護下に入った人に起源を持つとし、de Coulanges, F. や Forrest, W. G. 達に沿った見解が主張されている。ソロンの四階級の基準は穀物やオリーブ油と農産物による基準で、動産による富は認められなかった。

借主ペイシストラトスは、小農保護、対外進出、宗教政策などアテーナイの統一と発展に貢献した点、高く評価されている。

最後にクレイステネスの改革を述べる。Arist. *AP* の伝える〝新市民〟(*neopolitai*) は商工業者が中心で改革に際して市民に繰り込まれた。以後、土地所有は市民資格獲得の必要条件でなくなったし、土地なしのテテースも民会出席が可となった。彼がオストラキスモスを定めたとの伝承を疑うべきでない。六千票は有効投票数であり一人六千票の意味ではない。新部族制度設定の目的は、旧来の氏族に基づく特定地区と結託した有力者の出現阻止の為に市民を混合する点にあった。

第八章（The Greeks and the Persians）　ペルシア戦争を扱った本章には類書にないペルシア史が記述されており頗る便利であり、オリエント専制国家と比較し政治、軍事、社会とあらゆる面でポリス世界が如何に異質な世界であったかを読者は自然と

理解出来る。ペルシア戦争の考察上重要な史料であるヘロドトスの記述は極めて批判的に扱われている（ex. クロイソスとキュロスの対話、ダリウスのスキタイ遠征理由、イオニア反乱の原因、サラミスの海戦やプラタイアの戦いの経過）。

クロイソスが焚刑を免れた話がなぜ生まれたか。著者によるとデルフィ神殿が絡んでいる。多額の奉納をし敬虔なクロイソスを見殺しに出来なかったので、デルフィ神殿は *hybris* に対する *nemesis* と言う自己好みの発想を基にして彼が助けられる話を捏造したのである。前四百八十年にヒメラの戦いとサラミスの海戦が行われたのは偶然ではない。協定のある無しは別にして、ペルシアとフェニキアはギリシアに対して共同作戦を採った。

真憑性をめぐり議論のかまびすしいテミストクレス法令について確答は不可能であるが、前四世紀末から前三世紀始めにかけて反マケドニアの動きの中で、テミストクレスが前四百八十二から四百八十年にかけて発布した諸法令を基に合成されたと考えられる。

第九章（Delian League and Athenian Empire）　ペルシア戦争と言う外的危機に瀕し民族意識が高まったギリシアも危機が去ると再び対立の坩堝と化した。連帯志向に代わり、ギリシア世界が如何にスパルタとアテーナイの両極に分裂していったか、デロス同盟成立の契機は何か、同盟は如何に帝国化したか、アテーナイは如何に同盟諸国を支配したか等の問題が論じられる。

こうした諸問題の考察には戦後著しく進捗した碑文研究の成果が重要である。本書の性格上この点は論じられていないが、著者の碑文年代と解釈は多少の差はあるが基本的には *ATL* や Meiggs-Lewis の *Gr. Hist. Inscr.* に沿っているようである（ex. *ML* No. 40, 45, 46, 49, 52, 73）。

他方、文献史料ではプルタルコスを比較的高く評価するが、ツキディデスにはかなり手厳しい。例えば、スパルタのヘロット反乱前後の年代記述は混乱しており、キモンはスパルタへ二回実際には赴いたが、彼はそれを明言していない。エジプト遠征失敗の損害は僅少であった。パウサニアスをペルシア贔屓とするのは正しくない。デロス同盟成立の記述は曖昧である等々。

この他、二三の項目を拾ってみよう。デロス同盟会議はアテーナイの評議会・民会と同盟会議の二院制であったとの説（Hammond）は正しくない。葬送演説の慣習は、ドラベースコスの戦い（前四六五／四）の戦死者を埋葬した次第がエピアルテスやペリクレスによって法制化されたのを嚆矢とする。カリアスの平和は史実である。この和平を機に生まれた政治的経済的危機をペリクレスが解決していくが同時に同盟は急速に帝国へと傾斜した。しかし、この帝国化の原因は複雑で、同盟金のデロス島からアテーナイへの移動、同盟諸国が船より貢税の提出を好んだことなどの外的要因に加えて、アテーナイ人の性格、穀物への関心に象徴される経済的動機など諸般の事情が絡んでいた。同盟国支配の手段としては政治的経済的司法的干渉、植民市設立、駐留軍の派遣、プロクセノスの設立、宗教の利用などがあった。

第十章（The Development of Athenian Democracy）　デロス同盟の帝国化に随伴して生じた政治、経済、社会的変化に呼

応してアテーナイの民主化が徹底したとの観点から、民主制の機構と特質が本章で論じられる。クレイステネスの改革後も約半世紀間、国家は本質的には貴族的金権的体質を保持し続けたが、エピアルテスやペリクレスの諸改革によって民主制が完成していった。アレオパゴスの改革、アルコンの第三階級への開放、日当制の開始、市民権限定などである。エピアルテスの改革を外交面から解釈するのは正しくない。この改革は民主化をもたらしたが、過激なイデオロギー的な性格は認められない。日当制度はペリクレスが導入した。市民権限定の目的は人口増加阻止でなく、アテーナイ市民と同盟諸国の間に截然とした境を設けようとする帝国主義的な政策の現われである。

次に、役人、評議会、民会、裁判所等民主制の諸機構と運営面では役人の抽籤、輪番制、団体制度そして日当が論じられる。古代民主制への批判として、抽籤制度や素人裁判が俎上にのせられるが、この批判は当らない。近代的な意味での政党は欠けていたが、有力者中心の幾多のグループがあり政治を動かしていた。ここに古代社会での演説の重要性があった。民衆を衆愚の輩とみるべきではない。裁判にあたり彼等は時には誤りを犯したが、裁きが常に正義に悖っていたわけではない。

最後に市民の人口と構成、歳出、奴隷やメトイコイの問題が扱われる。メトイコイが市民から差別を受けたとの証拠はないが、彼等が多大の貢献をなしたにも拘らず市民権が賦与されなかった所にアテーナイ市民の狭量さが反映されている。本章は単に古代政治を論じるのみか、技術の進歩が直接選挙をも可能にするような今日、間接選挙の是非、任期や *euthynai* の意義等現代の政治を考察する上にも極めて多くの示唆を与えてくれよう。

第十一章（The Peloponnesian War）ここではペロポンネソス戦争の主史料『戦史』を著したツキディデスの生涯と思想、著述の開始年代、歴史方法論を述べた後に、戦争の経過が語られる。著者の史家ツキディデスに対する評価は極めて辛辣である。そもそもギリシアの歴史家は皆保守派に属する。彼等を史料に用いる際は、常に批判的に扱われなければならずツキディデスも例外ではない。彼には貴族と共通した下層民への軽蔑が認められる。かかる傾向は『戦史』にしばしば現れる。ペリクレス弁明の気持からメガラ問題を不当に低く評価している。エギナ問題も当初黙して語られないし、ペロポンネソス戦争勃発原因も明言していない。彼はアテーナイ側の攻撃的意図を明白に認めていたにもかかわらず、これを公言するには余りにもペリクレス下のアテーナイの賛美者過ぎた。

またクレオン像も彼のみかアリストパネスやアリストテレス等全てが真実を歪めて伝えている。アリストパネスのソクラテス像を人は信じないのに、クレオンのそれを否定しないのは理解し難い。ツキディデス追放の原因となったアンピポリス攻略も、アテーナイの準備不足、将軍の責任は明らかである。

次に『戦史』の演説に関しては、作者がアテーナイに滞在中の演説（例えば、ペリクレスの演説）には真実があるが、外国や作者が追放中のアテーナイで行われた演説には話者よりも作者の考えが示されている所がある。メロスの対話は当時の悲劇の手法を

用いてネメシスたるシシリー遠征を生むことになったアテーナイのヒュブリスを強調する点に作者の意図があった。シシリー遠征の悲劇的な描写は読者に哀れみを催すが、これは歴史を著したり読む時に起こりやすい偏見の恰好の例である。本来ならば周到な準備のもとに侵入者の意図を撃破したシラクサ人と共に人は喜びを覚えるべきなのである。

またクセノポンにも著者は批判的である。テラメネスは彼が伝える程には卑劣な人間ではなかった等多くの批判がなされている。

第十二章（The Fourth Century）本章はペロポンネソス戦争終結後から前四世紀中頃、アテーナイの敗北に終った同盟市戦争終了までの正しく慢性的戦争状態のギリシア世界を述べる。まず当時代の考察に重要な史料を批判検討してから、アテーナイの社会経済史を論じる。前世紀の戦乱を機に土地の流動化、商品化が生じ名実ともに売買が自由になった。経済的には市民以上にメトイコイや奴隷が重要な役を果し、軍事的には傭兵が中心となっていった。社会経済的変化に呼応してポリス倫理も変化し、個人主義が広まった。スパルタも貧富の対立が激化しリュクルゴス体制が崩壊に瀕し、対外的には同盟諸国の不満がつのっていった。

だが前四世紀は単なる混乱の時代ではない。*koine eirene* やアルカディア同盟などにみられる同盟組織が試みられ、ポリスの新しい活路が模索された注目すべき時代であった。しかし、前世紀の反省を基に成立した第二次海上同盟も結局はアテーナイと同盟諸国の対立、混乱に終始したように政治的安定は得られなかった。

第十三章（Macedonia and Greece）終章は政治的に混乱するギリシア世界の背後で、マケドニアが如何に発展しギリシア世界を征服したか、フィリッポス二世の死に至る時代を論じる。アレキサンドロス大王の時代は扱われていないが、フィリッポス二世の時代と政治は詳細かつ要領良くまとめられており、類書にない特長となっている。フィリッポス二世はギリシアの政治的混乱を収拾した優れた政治家として高く評価されている。他方、デモステネスに対しては極めて厳しい。マケドニアの南下侵入の一因は彼に責任の一端があったとされ、同時に雄弁が政治世界で持つ危険性が指摘されている。因に、本書を酷評している S. Hornblower（*CR* vol. XXXIV (1984), No. 2, p. 243）も十三章を讃えていることを述べておこう。

最後に本書の特徴をまとめておこう。以上の内容紹介から窺える如く、本書は政治史中心であって宗教、美術、文学等文化史的側面はほとんど論じられていない。引用文献は類書に比較するとかなり僅少かつ新旧の片寄りが感じられる。さらにその都度異説を述べているとは言え本書全体を通じてかなり奇異な見解が展開されているとの印象を評者は得た。この点初学者は注意して読まねばなるまい。しかし、本書の副題と、前書きにある定説盲信の戒めならびに史料を虚心に考察する必要を説いた著者の言葉を心に留めながら読むならば、本書もまた有益な書となろう。なお評者の読み違いかもしれぬが、時々行間に過去五十年のアメリカ史が浮んで来たのは面白かった。

(85. II. 7)